



N P O 法 人
ほっかいどう学
推進フォーラム



理事長

新保 元康 (しんぼ もとやす)

1958年小樽市出身。82年北海道教育大学札幌分校卒業。小学校勤務とともに、北海道社会科教育連盟や北海道雪プロジェクト等に長年参画し、地域教材を多数開発。また文部科学省の情報化推進事業の各種委員も歴任。2019年屯田小学校長を定年退職。8月からNPO理事長として活動を本格化。

GIGAスクール構想と ほっかいどう学

NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム

連載3回目は、最近の学校事情についてお話しさせていただきます。実は、「ほっかいどう学」にとっても非常に重要な大改革が、日本の学校で起きつつあります。その名は「GIGAスクール構想」です。

1 GIGAスクール構想とはなにか

GIGAスクール構想を簡単にまとめると次のようになります。

- ・小1から中3年まで、1人1台PCの貸与
- ・高速大容量通信回線の整備
- ・クラウドの活用

日本全国の小1から中3までの児童生徒の人数およそ1,000万人に1,000万台のPCが用意されます。しかも、動画をスイスイ見られるような高速大容量通信回線でクラウドにつながれます。

これによって子どもたちの多様なニーズに応じた授業が可能となります。いくつか例をご紹介します。



- ・ 不登校の子は、遠隔で家庭にしながら授業に参加することができるようになります。
- ・ 国語が苦手な子には、デジタル教科書のボタンをクリックすると「ふりがな付き」に一気に関わりやすくなります。
- ・ 算数などのドリルは、各自の能力に応じて、先に進んだり、苦手なところに戻って学び直したりできます。
- ・ 社会科では、自分の分からないところを授業中に調べることができるようになります。
- ・ 感染症や悪天候で休校の場合には、オンライン授業に簡単に切り替えることができます。
- ・ 小規模校と大規模校の子どもたちが一緒に遠隔授業を行えます。中学校で一緒になったときにも気後れせず、よりスムーズに学ぶことができます。
- ・ AIの活用も加えたクラウドサービスによって、子どもたちの理解度に応じた学習アプリの提供も始まりつつあります。
- ・ 各自のPCでプログラミングの学習も簡単に行えます。

つまり、これまでの一斉学習では不可能だった、1人1人のニーズに応じた細やかな授業が可能となるのです。チョークとトークと紙で進められてきた日本の学校教育に大改革が迫っているのです。

しかも、計画はコロナで大幅前倒しとなりました。当初は令和5年度までに整備するものを、令和2年度中に全て行うことになったのです。

2 「教育にPCは必要なのか」

「教育にPCは不要では？」と疑問に思われる方はとても多いと思います。答えは、「学校教育のICT活用は必須」です。実は世界の教育は、急速にデジタル化が進んでいるのです。

コロナ禍で、全国の学校が約3カ月間臨時休校となりました。そのとき、海外ではオンラインで授業を進めている一方で、日本ではオンライン授業がほとんど

出来ないことが明らかになりました。web会議システムを使った双方向の授業が出来たのはわずか5%の学校です。学校から大量に届けられるプリントに、ご家庭からは悲鳴があがりました。

実は、コロナの前から日本の学校教育でのICT活用には大きな問題がありました。二点ごく簡単に紹介しましょう。

一つは、日本の子どもにとってPCとは「学習に使わず、ゲームに使うもの」だったのです。世界は逆です。授業でPCを使うのは当たり前、PCで調べたり、発表したりするのは普通のことという国が増えているのです。

もう一つは、国際的な学力調査の結果、日本の子どもたちの弱点が浮き彫りになったことです。国際的な学力調査は、CBT*というPCを使ったテストになっています。日本の子どもは、PCで複数の資料に当たりながら自分の意見を書くというテストの成績が非常に悪かったのです。PCでテストするという行為自体に慣れていなかったという点も大きな問題と意識されました。

昨年12月、萩生田文部科学大臣（当時）がGIGAスクール構想のスタートに合わせて次のようなメッセージを出しています。

ソサエティ
Society 5.0時代に生きる子どもたちにとって、PC
 端末は鉛筆やノートと並ぶマストアイテムです。今や、仕事でも家庭でも、社会のあらゆる場所でICTの活用が日常のものとなっています。社会を生き抜く力を育み、子どもたちの可能性を広げる場所である学校が、時代に取り残され、世界からも遅れたままではいられません。1人1台端末環境は、もはや令和の時代における学校の「スタンダード」であり、特別なことではありません。これまでの我が国の150年に及ぶ教育実践の蓄積の上に、最先端のICT教育を取り入れ、これまでの実践とICTとのベストミックスを図っていくことにより、これからの学校教育は劇的に変わります。
 （部分引用 出典：文部科学省HP,GIGAスクール構想の実現について、「子供たち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育む教育ICT環境の実現に向けて～令和時代のスタンダードとしての1人1台端末環境～」
 ≪文部科学大臣メッセージ≫）

* CBT (Computer Based Testing : コンピュータ・ベースト・テストイング)
 紙と鉛筆を用いて試験を行うのではなく、コンピュータ上で試験を行う方法。

このメッセージには「ベストミックス」とあります。これまでの日本の教育は決して否定されるものではありません。これまでの、一斉授業の「技」の上に立ち、ICTの活用を奨めることで新しい日本の教育が創られていくのです。

3 GIGAスクールには「ほっかいどう学」が必要

GIGAスクール構想が成果を挙げるには、PCや通信インフラ環境を活かせるコンテンツが不可欠です。ほっかいどう学は、次のような貢献をしたいと考えています。

① 地域学習のコンテンツを提供

全国的に使用される教科書などの教材は、既にデジタル化が進んでいます。今後さらに質の高いコンテンツが提供され、学校で使われることでしょう。利用される数も非常に多く見込まれるため、教育関連企業による教材の提供も進むはずですが、

一方、学校での授業は全国一律のものだけではありません。自分の住む都道府県、市町村の学習はとても重要です。しかし、ここでは市場が限られるため、教育関連企業による質の高いコンテンツの提供が難しいのではないかと懸念しています。NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムでは、多くの皆様のご支援をいただきながら、北海道の未来のためにこの困難に向き合い、貢献したいと考えています。

② 地域教材のプラットフォームの提供

ICT時代に重要なのは、自分の必要とする情報を検索する能力でもあります。しかし、ネット上の膨大な情報の中で子どもたちが限られた授業時間中に子どもでも分かる教育的価値ある情報を発見するのは大変なことです。子どもたちが、素早く良い情報にたどり着けるようなネット上のプラットフォームをほっかいどう学では提供したいと考えています。

③ シンプルで質の高い探究的な学びのモデルを提供

令和の時代は、何かの決まりを覚えておけばそれで済む時代ではありません。例えば、社会科や総合的な学習では、PCを活用しながら多様な立場や考え方を知り、認め合い、事実をもとに議論しながらよりよいまちづくりの方向を探っていくという創造的な学びが重要になります。

北海道を支えるインフラについても、その役割を正しく認識しながら、未来のわが町、わが北海道の魅力をさらに膨らませるアイデアを競い合うような学びも重要になります。現場の先生たちは大変多忙です。ほっかいどう学は、このような理想的な授業を、PCを活用しながらシンプル行えるモデルを提案したいと考えています。

わが国の未来を創る「GIGAスクール構想」、ほっかいどう学はここにフォーカスしながら、前進してまいります。

GIGAスクール構想の実現 4,610億円 (文部科学省計画)

Society5.0時代を生きる子どもたちに相応しい、誰一人取り残さない公正な教育環境の構築が、高度性を育む学びを実現するため、「1人1台端末」による個別学習環境を整備する。

- 学習する子どもたちの学びの環境を整備
 - 学びにおける時間・空間などの制約を取り払う
 - 個別に最適で効率的な学びや支援
 - プロジェクト型学習を通じて創造性を育む
 - 校務の効率化
 - 学びの発見の共有や生成
- 児童生徒の遠隔学習支援
 - 1人1台端末の導入 2,973億円
 - 障害のある児童生徒のための入出力支援装置整備 11億円
- 学校ネットワーク環境の整備 1,367億円
- GIGAスクールガバナンスの整備 1,05億円
- 緊急時における家庭でのオンライン学習環境の整備
 - 家庭学習のための通信機器整備 147億円
 - 学校での通信学習環境の強化 6億円
 - 「学びの保障」オンライン学習システムの導入 1億円

11月21日(土) 午後

第2回ほっかいどう学シンポジウムを開催します。

テーマは「GIGAスクール構想とほっかいどう学」

※詳細は、ほっかいどう学ホームページをご覧ください。

<https://hokkaidogaku.org/>

*国土交通省北海道開発局が中心となって進めている「ほっかいどう学」については、以下に情報が掲載されています。
<https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/ki/keikaku/splaat00000ozs0.html>